

芸能のはじまり!?

そのだ ひさこ

この半年、気づけば新型コロナウイルス関連のニュースで、一日の大半が埋めつくされるかのような日常になってしまった。入れ代わり、立ち代わり感染症関連の専門家の

方々の提言はなされているが、「見えない敵」との戦いにはその先行きがなかなか見えない。自分や人の命を守るために、今までの生活スタイルを否応なく変えていかざるを得ない事態に日々直面している。課題は膨大であるが、誰にもわかるテレビの画面の変化について気づいたことから一つだけとりあげることとする。

以前から私は、テレビでは動物関連番組とお料理番組が好きだった。前者の動物の生態などを知ることには人間がどういう生き物かを知るうえで大変興味深く、後者は私が料理を好きだからである。実はもう一つ、大好きな番組がある。お笑い番組である。(家で過ごす時間)の増加のなかで、必然的にお料理番組がどのチャンネルに

も増加していることはもちろん、もう一つ、ロケ時間が取れない今、お笑い芸人の登場がいろいろな番組に圧倒的に増加してきているように思う。

今をときめく芸能関係の人々、広くは「俳優」とよばれるこの言葉は、実はすでに『日本書紀』に出てきていて「巧みに「俳優」(す)と読まれている。これはアマテラスが岩戸に隠れ世の中が闇になった時、その岩戸の前で、アメノウズメの巫女が踊ったさまを言っている。この巧みな踊りによって、世は光をとりもどしたというわけである。

万葉集でも、言葉による「祝いごと」をのべる人々のことを「乞食者」という表現がされている。彼らはまた、中世・鎌倉時代には「散所乞食法師」として資料に現れる。酒つくりなどの予祝芸(酒がうまくできるようにと前もって祈り、祝うこと)のあと、猿楽などの芸を余興として演じたりもして

いた。この豊作を祝う猿楽・田楽の名手が後の室町時代の観阿弥・世阿弥親子で、今日の日本の伝統芸である能(楽)の名曲を数々生み出すこととなる。しかし、彼らの能は当時「乞食処業」と貴族たちに嘲笑され、「字の読めない彼らが能の名曲を書けるはずがない。貴族たちが書いたものを彼らは演じただけだ、踊っただけなのだ」と数百年にわたって言われていた。ところが、明治時代末「世阿弥伝書群」が早稲田大学の歴史学者によって発見され、その後、世阿弥の直筆の原曲も発見されたのである。

今で言う漫才も能も、乞食法師・乞食の処業として、当時社会的に差別されていた人々によって生み出されたものである。この被差別の人々まで視野を広げて、人権・部落問題も豊かに学びたく「学びをつなぐ講座」に招かれ、市民の方々と学習している。

- TUNAGU II とは 人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えるために、そのだ ひさこ先生(福岡県人権研究所副理事長)に執筆していただき、偶数月1日号に掲載しています。タイトルの「TUNAGU」には、人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐなど、「共生」と「人権」の時代の到来を願う歴代の執筆者の思いが込められています。

- 問い合わせ先 教育政策課 人権・同和教育担当